

TALLYHOOO!!

集  
し星々の絆が  
過去と未来の道を繋ぐ——!

# 滅☆星

CHILDREN OF PURE REASON

—— 純粹理性の子どもたち ——

漫画+絵+小説  
+感想いろいろ  
全170P

はじめに

このPDFは、Y(わい)が運営する個人サイト「TALLYHOODOO!!」にて掲載した「遊戯王5D's」の非公式二次創作をまとめたものです。公式とは一切関係ございません。

遊戯王アニメ公式Youtube

2025年4月7日-7月14日の一挙配信をきっかけに「遊戯王5D's」にハマった(ほぼ)初見勢が衝動のままにアクセルシンクロした漫画・絵・小説・語り・感想の総合格闘妄想デッキになります。

以下を多分に含みます。

- ・捏造妄想、こうだったらいいな願望
  - ・真面目なシリアスからゆるいコメディまで 寒暖差激しめ
  - ・OCGネタ(デュエルリンクス、マスターデュエル含む)
  - ・ど滑り激寒キショ自我コメントが急に湧くフリースタイル編集
- ## ・自萌え

▼再編にあたって

- ・制作者Yの**"見たい文脈"**に沿って掲載しています(目次参照)
- ・一部加筆修正を加えています。

少しでもお楽しみいただけましたら幸いです。

自我がキツイ方は個人サイトのまとめページからどうぞ！

<http://tallyho.fool.jp/YGO/>

TALLYHOODOO!! / Y(わい)


## 純粹理性の子どもたち


遊戯王SD's unofficial fanbook vol.00


index


<http://tallyho.foo1.jp/>

### 漫画


 「置いてけぼりにしてごめんね」


 閑話休題 一挙配信中の感想から  
完走後の感想漫画

 「きみはゆりかご」

 「パラドックス対話篇」

 「忘れないよ」

 「今度はボクが」

 「不滅の遺伝子」


 「アンチノミー対話篇」

 「アポリア対話篇」

#### ゆるめの単発漫画群


 寝かしつけ/神は来世を約束する/謎D誕生の秘密


### 一枚絵いろいろ

 定言命法/ある皇帝の肖像/夢みるように目覚めて/春にして君を離れ

### 編集後記

### 書き下ろし

 小説「星の方舟」

 漫画「純粹理性の子どもたち」

### 奥付

Q, この世の最高存在たる神は  
なぜ我々人間に自由意志を与えたのでしょうか？

**A, 遊戯王5D'sを観てください。**

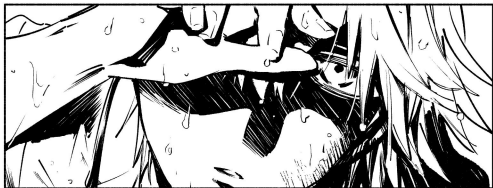
アーククレイドル編に""答え""がすべて描かれていました。

こういう謎のページがよく換まります(怖…)  
それでは一挙配信後に描いた漫画を一本どうぞ！


思い出す

あの青い空の  
遠い宇宙の先

なにか  
大事なものを  
忘れてしまったことを







「置いてけぼりにしてごめんね」

-Thank you, Team 5D's I-





ごうやうて

速くを  
眺めていると  
思うんだ

……どこかに



ボクを  
待っている人が  
いるんじゃない  
ないじゃって……



ふざーん  
待ってる人  
ねえ

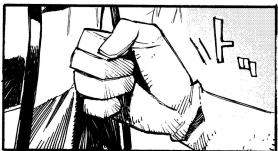
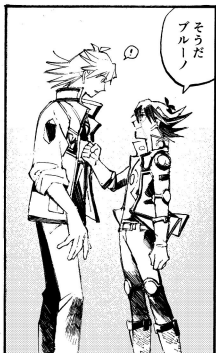
……前にも  
同じことを  
言っていたな  
ブルーノ

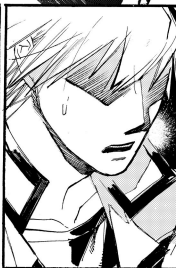
くだらん

何を物思いに  
耽っているのかと  
思えば

そいつは  
おまえに  
置いていかれて  
愚図るような  
根性なしなのか？














両腕で  
めいっばい  
お迎えして  
あげて！





置いてけぼりにして  
ごめんねーって！

2025.07.01.

Yu-Gi-oh!  
5D's

Thank you for the broadcast!!

「置いてけぼりにしてごめんね」 2025.08.11.

---

一挙配信後、ドボドボに泣きながら描いた“感謝”の漫画でした。

最後にゾーンさまをお迎えするのは  
あくまで人間のジョニーさんたち滅四星のみなさんであって、  
機械のブルーノさんではないんですよね。  
分かってはいる 分かってはいるんですけど、どうしてもこの漫画を描きたかった…。

谷川俊太郎さんの「かなしみ」と「忘れっぽい天使」があまりにもブルーノさんだなあとあって、  
こんな導入になりました。忘れっぽい天使、元のクレーの素描もまた…いいんですよね…。

ブルーノさん、“ほほえみながらうらぎ”っていくんですね。  
ブルーノと一緒に元の世界へ帰りたいと願う目の前の遊星さんも、  
機械のしもべとして未来のために働くと誓った仲間のゾーンさまのことも。

カントの「純粋理性批判」よろしく  
正命題と反命題、どちらも成立する二律背反—遊星とゾーン—の狭間で  
己の自由意志を貫いたアンチノミー/ブルーノ氏の生き様に、ただただ乾杯です。

ありがとうチーム5D's、ありがとう滅四星。

---

←次から閑話休題、一挙配信中の落書きや絵・感想です

# ここからはじまる

わい@tallyhoo 2025/06/05 21:08:40(投稿日)



Y氏の個人サイトの壁打ちコーナー(<https://tallyho.fool.jp/tegalog/>)2025年6月5日のメモに投下された画像、一挙放送分85-108話ごろから参入した模様。スキャン画像よりiphoneのカメラ撮影の方が色味が良い高画質を添えて。

**Youtubeで5D's一挙配信やってる!!しかも有名なクラッシュタウン編!**  
初代原作リアタイ勢(歳がバレる~)、何度もチャレンジしては序盤で中断していた  
あの遊戯王5D'sを完走するチャンス!!  
信頼じている地元(?)のフォロワーも後押ししている、これは、**“乗る”**しかない——!!

というふりで、余った水彩用紙の切れ端にお試しで描いた二人です。  
この時はここまでハマる予定は、ありませんでした。  
そう、問題の**“あいつ”**と出会うまでは…。

だが今は頼む...

# #77

## !?!?!?!?!?!?!?

# 助けてくれ マジで

こいつは  
執事の  
ブラッド!

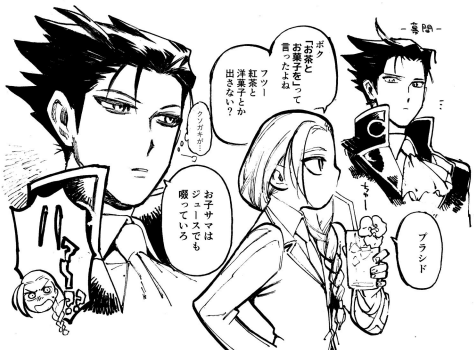
※きませし

※手袋は  
つけません

ブラッドさん、リノリ(?)で  
執事プレイに付き合うから  
「こいつがいちばん下っ端のブラッド!」  
事件が発生してしまった可能性が...?

普段白くて美しい  
成人男性を模した  
機械の身体をもつ  
ブラッドさんをもつ  
黒髪オールバックの  
黒執事にして  
本当に、本当に、  
誠にありがとうございます  
ごさいました

(この世でも最も  
男が好きなため!)



「お茶と  
お菓子をとって  
言ったよね  
フツー  
紅茶と  
洋菓子とか  
出さない?」

クソガキが...  
お子サマは  
ジュースでも  
嘔っている

- 音 -

ブラッド

マジでこの人さえ...ブラッドさんが黒執事にならなければ...  
メカバレじなければ..... こんなことには.....

このペンとブラッド回で、  
完全にネジが外れた記憶があります

こちらのブルーノさんという  
青髪的好青年は、不動遊星さんの  
守護天使-Guardian Angel-で、  
いらっしゃいますか？

**199cm**  
**87kg**  
**?!?!?!?**

そんな遊戯王5D's界の  
ティポ・ニコラ・マルク・クルトワなんですよ(?)

※サッカー・ベルギー代表選手兼  
レアル・マドリード所属のゴールキーパー(199cm96kg)  
でかい・はやい・つよい現代サッカー世界最高峰の守護神

これはブルーノさんを  
守護天使だと思い込んでいる  
人間にしか見えない巨大な翼  
(199cm87kgの成人男性を  
飛ばたかせるほどの) (恐怖)



サッカーオタクなのですぐサッカーの例えが出ます。  
実在のサッカー選手を引き合いにブルーノさんがデカイことに感動していますね。

「守護天使ブルーノ、聖・不動遊星に  
プログラムの改良案を提言する」

(タイトル)

※これらの絵は、遊戯王SD's一巻配信～107話までを見てブルーノさんを不動遊星さんの守護天使だと思い込んだ初心者の妄想&感想絵です。  
本編をご覧の通り、ブルーノ氏に巨大な翼が生えている等の描写・イメージ図は一切ございません※(多分)

「英雄の凱旋を迎える天使」

(タイトル)

完走した今となってはこのへん見返すと正直オモロい(自分で笑っていくスタイル)  
ブルーノさん、正しく守護天使—Gurdian Angele—でしたね…

→  
もうブラシドさんに目星つけてる…



wai @tallyhoo 2025/06/09 20:06:21

ブラシドさんのデザインすき（デコ出し/オールバックの男がこの世で一番好きです）（一挙配信109話～見てます） #遊戯王



wai @tallyhoo 2025/06/11 21:35:18


#遊戯王

すいませんこれだけは言わせて

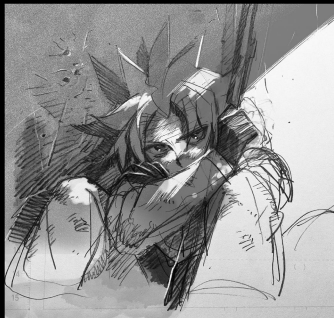
不動遊星さんって、もしかして、——地上の星——？（中島みゆき）(は?)



wai @tallyhoo 2025/06/11 21:37:09

ていうかもしかしてもしかしくなくても、不動遊星さんって、""""の龍の背に乗って""""いっちゃう——？(???) (ライディングデュエル・アクセラレーション！)

我ながら本質を突いている(多分ダグナー編・遊星の出生の話を見ていたころの感想)  
実際、不動遊星さんって「銀の龍の背に乗って」いる「地上の星」だったし…

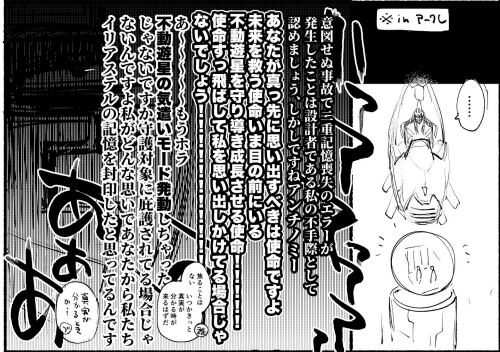


こ  
こ  
だ  
け  
一  
挙  
配  
信  
+  
後  
追  
い  
感  
想

このへんは未来組の真実が語られたあたりの衝動らくがき▲  
確かすぐらいとこで切られてましたよね(アンチノミー-正体バレ)▶  
ブラシド(若アポ)さん、人間時は二目あり&ハイライトしっかり  
入ってるので印象が全然違う！！

←次から完走後の感想漫画







三つの絶望は  
一つになったのでは  
なかったのですか

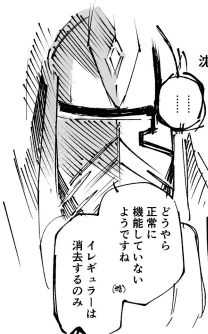
プラシドが  
なぜ...

創☆神☆主  
神☆主☆



意図せず公式(神)に認知されて  
ビビリ散らかすオタクみたいで  
ちょっと同情した

会話中ずっとゾーンさま目が隠れてたけど  
どういう表情してたんですか？



沈黙怖...

どうやら  
正常に  
機能して  
いない  
ようですね  
イレギュラーは  
消去するのみ

私は.....

私は.....

ああ.....  
ゾーン!

私?!?!?!?

わがわが!!!!!! 涙涙

神の前でいい子ちゃんモード発動したのか  
エラーでアポリアさん出ちゃった?????

# プラシド ちいかわ説

なんか白くて  
ちいさくて  
上位存在に  
怯えて震えて  
かわいいから  
プラシドさんは  
ちいかわちゃん  
だったのかも  
しれない(大嘘)

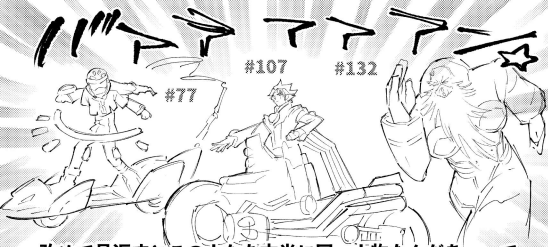


※メンテナンスが完了しました※

※このゾーンさまの縮尺は嘘をつけています  
もって手がでかく見えるはずです(歓喜)



ルチ&ホセが  
普通に対応してたら面白い  
(ホセは対面済...?)

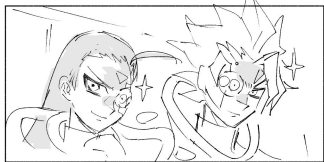


改めて見返すとこの人たち本当に同一人物なんだあ…って…

己のパワー顯示したい魂を感じる

優作

後方完全「理解」面



ホセ爆走に  
スタジアム中が  
困惑するなか  
裏方二人の  
無言ドヤ顔良すぎ  
←

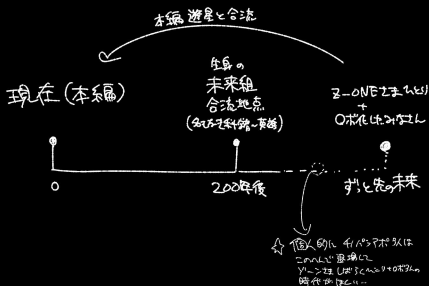
Q.自信満々ですね

当たり前だ

神が！  
オレたちのためだけに！  
与えた特別な力だぞ！

## ここから滅四星の真面目な漫画

こちらはwaveboxでいただいたご質問に添えた回答メモです(なぜここに…)ざっくりこういう時間軸なのかな〜と妄想してました ご参考まで…



きみはゆりかご





ゾーン  
眠るのかい？



…はい

二時間ほど  
仮眠を

アポリアを  
再起動している  
間に…  
終わったら  
起こしてください



二時間…  
わかったよ





…随分と気安く  
創造主に  
楯突きますね

そのように  
あなたを設計した  
覚えはありません



この道は…  
遠回りを？

ふふふ  
ゆりかごだよ



そうなのかい？  
その割には  
自由にやらせて  
もらっているね

……



ゾーン  
生憎  
だけどね

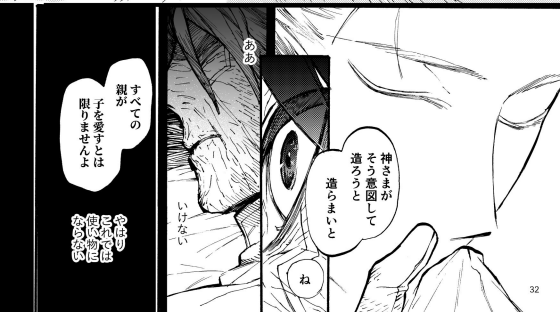




すべての  
被造物は

創造主の  
どんな命令や  
設計よりも

創造主への愛が  
勝るように  
生まれて  
しまっんだ



ああ

神さまが  
そう意図して  
造ろうと  
造らまいと

造らまいと

ね

すべての  
親が  
子を愛すとは  
限りませんよ

やはり  
これでは  
使いために  
ならない

いけない

おやすみ  
ゾーン

彼から  
消さなければ

また明日…

私たちに關する  
一切の記憶を


遊星



この世界を  
救ってくれ!

この世界を  
救い

そして



ゾーンを  
救ってやってほしい!



ゾーン  
私はキミにも  
思い出して  
ほしい

キミが  
遊星たちに  
抱いていた  
希望を!

キミは  
チーム500の  
進化を促した



だがなぜ  
アンチノミーの  
記憶を消した!

なぜ  
未来を託すに足る  
存在となった彼らを  
抹殺しようとする!


ゾーン!



なんでだよ

なにも  
ここまで  
しなくても！


アポリアは  
おまえの仲間  
だったんだろ！



「愛」と「最高善」は  
自由意志によって  
のみ証明される」

「ゆえに神は  
被造物たる人間に  
自由意志を  
与えた」と」

だがね  
ゾーン



キミは  
子らの愛で  
その身を焼かれる  
ことがないよう



仲間？



何か  
誤解している  
ようですね

今のアポリアは  
私を作り上げた  
記憶を持った  
コピィ

彼やアンチノミーは  
君たちに関わりすぎ  
感化されすぎたようです

「きみはゆりかご」 2025.08.27.

---

本編完走後、未来組を想うと辛すぎて

「もうアンチノミー氏が老ゾーンさまを寝台へ運んで寝かしつけるだけの漫画描かないとやってけないよ！！！」と暴れながら描いた漫画だったと思います。

アボリアさんからゾーンさまへの問いかけは

古来から人間から神に投げかけられ続けた問いですね。

「神はなぜ我々人間に自由意志を与えたもうたのか?!」…涙涙涙

自由意志は「愛」「道徳」の証明と各所で説かれますが、

もしかしたら「問う」ことも自由意志の大事な役割の一部なのかな～と思いました。

自由な意思と発想と理性なくして「問い」は発生しないので…。

# パラドックス対話篇

自由意志について



対話者

ゾーン  
パラドックス  
不動遊星



目覚めましたか  
パラドックス

いかがです

新しい身体の  
乗り心地は

ゾーン

これは  
キミの  
生命維持装置

本来  
いち複製に  
過ぎない私が

生前の記憶と  
意志そのままに  
触れてよい  
ものではない

— 答えてくれ




なぜ  
被造物の私が  
キミに――

創造主に  
弓引ける？



安心しました

その様子なら  
正常に機能して  
いますね



なぜ  
複製の私に  
「自由意志」など  
与えた

私は  
キミのしもべ  
として動く  
と誓ったのだよ

被造物が  
創造主の正気を  
疑うことなど  
あってはならない！

答えろ  
ゾーン

自由意志は  
猜疑の温床

キミの手足が  
叛逆しない  
保証が  
どこにある?!

可能性!

ナンセンスだ

キミたちの  
意志と可能性  
その  
信賴の証です

我々の結論に  
不確定要素が  
入り込む余地など  
無い!

— 聡明な  
あなた  
が  
いったい何を  
恐れるのか

10千

バラドックス

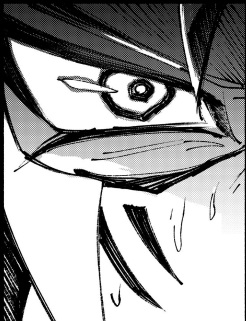
あなたの使命は  
ひとり時を廻り

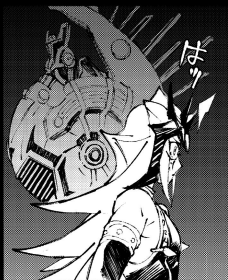
ベガサス  
創造主ごとDMを  
人類の歴史から  
葬ること

歴戦の  
決闘者と  
対峙し—



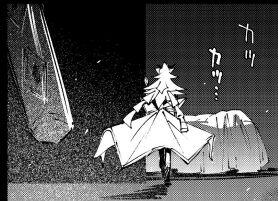
不動遊星にも  
牙を剥けるの  
ですよ







…なるほど



カリッ  
カッ…



「愛<sup>ク</sup>と  
最高善<sup>ク</sup>は  
自由意志に  
よってのみ  
証明される」

—ゆえに  
神は  
被造物たる  
人間に  
自由意志を  
与えたと…



……



私は



ご忠告  
感謝します

燃やす骨は  
持ち合わせて  
いませんので



だがね  
ゾーン

キミは  
子らの愛で  
その身を  
焼かれぬよう




幼い時分から  
不思議で  
ならなかった

なぜ神は  
厄介な  
自由意志などを  
ヒトに  
与えたのかと



だが

真に完全に  
自由な意志など  
存在するのか？



自由意志を疑う  
この私の思考すら  
自然法則の  
ひとつではないか？

ヒトの知性では  
計りえぬ  
宇宙の因果律を  
矛盾を抱えて  
自由な生など  
可能なのかと…

鳩は

空気の抵抗が  
なければ  
自由自在に  
飛べると  
考えるでしょう

しかし

真空中の中の鳩は  
自在に  
飛び回れない  
ものです

は！

なるほど  
カントの  
アイデア批判か

重力なしには  
揚力も  
発生しないと

面白い

では  
私は

創造主から  
授かった翼で

時の空を  
自由にく  
羽ばたくとしよう




パラドックス

あなたの使命は  
ひとり  
時を廻り

ベガヤス  
創造主ごと  
DMを  
人類の歴史から  
葬ること



歴戦の  
決闘者と  
対峙し――



わたし  
不動遊星にも  
牙を剥けるの  
ですよ



だが  
オレたちは  
壊滅した街を

「復興してきた」

友よ



「サテライトと  
シティを  
ひとつにしてきた」

そんなことは  
百も承知なのだよ

私は  
私自身の意志で  
キミの原型に  
牙を剥くことで

不動遊星！



キミの  
信頼と  
未来に  
報いよう

—私は

遠い未来から  
やってきたのだ

世界が滅亡した  
未来からな…

パラドックス  
対話篇  
-自由意志について-

# パaddockス氏の 仮面デザイン × 画面演出が 天才すぎる

映像のセオリーとして

- ・画面右・上手は主人公側(立ち向かう)
- ・画面左・下手は悪役側(立ち塞がる)



に立つことが多い。  
パaddockスさんは「超融合」において  
歴代主人公たちに「立ち塞がる悪役」として  
デュエル中など基本は画面左手側(下手)に  
立っていることが多いのですが…

# 上手と

かみて

仮面のデザインが

- ・左半分・唇を閉じたシリアスな白い面
- ・右半分・不適な笑みを浮かべる黒い面



それぞれ上手/下手に立った時に  
片方の面が見えるデザインになっており

イリアステル滅四皇として  
破壊の未来を救うために時空を駆け巡る「善」

歴史変更のため  
DM創始者ベガサス抹殺に備える「悪役」

彼が持っている二つの顔、  
善⇔悪役の「二面性」を体現する  
“完璧なデザイン”“すぎませんか???”

# ありがとうございます 加々美高浩さん…(神)

※ただし①に反しない限り



- ロボット三原則
- ①人間に危害を加えてはいけない
  - ②人間の命令は絶対
  - ③①②に反しない範囲で自己保存に努める

ゾーン!

なぜ私にも管理者権限が

やべー  
救急...

Owner:  
Z-ONE  
Paradox

これは仕様か?!  
設定ミスか?!

ほーん



これから神殺しに行く身でいまさら何を...

いえ  
まだ研究と実験が山積みですし

「Z-ONE」は偉大だも、しかし「Z-ONE」って「Z」って「Z」だ...

「Z-ONE」って「Z」って「Z」だ...  
正しい設計だったか?!

「忘れないよ」

アンチノミー

これから  
あなたの記憶を  
すべて消します

忘れないよ

絶対

あなたは私たち  
イリアステルを離れ

敵として  
相対します

キミたちと  
共に  
駆け抜けた  
日々を

楽しいこと  
全部

不動遊星を守り  
導いてください

そして  
未来を変える  
手助けを

必ず  
未来を

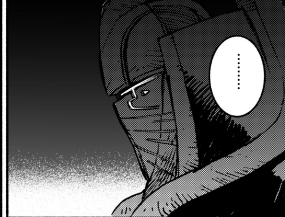
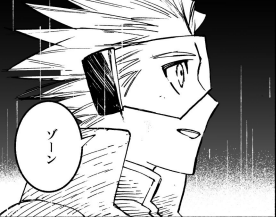
そして  
キミを救おう

……  
……もう  
時間が  
ありません

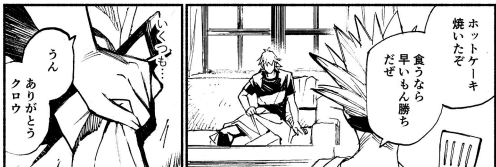
私には……  
この手しか……

ありがとう

最後  
ボクに  
時間をくれて

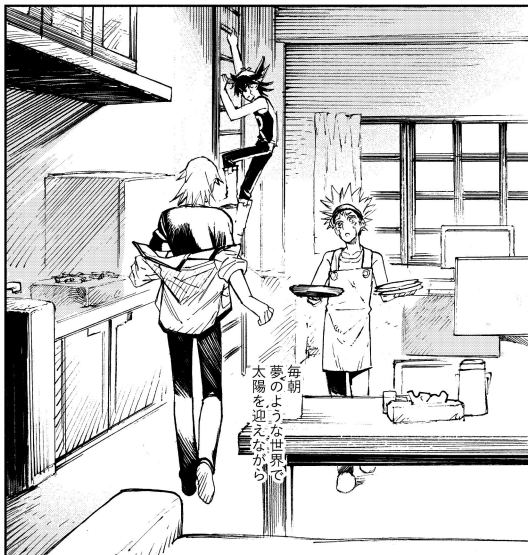






支度  
ボクも  
手伝うよ

ボクは今日も  
夢をみる



毎朝  
夢のような世界で  
太陽を迎えながら

「忘れないよ」 2025.09.07.

---

3ページ目は偉大なる原作様「遊★戯★王 遊闘198：友情に向けて撃て!!!」  
洗脳城之内くんvs表遊戯の名シーンから引用させていただきました。

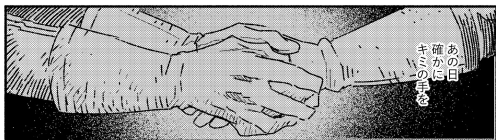
初登場時に「暴力大キライー!」と反暴力の意思表示を辞さないところとか  
実はもうひとりのボク要素ならぬ記憶喪失設定持ちとか一人称ボクとか、  
ブルーノさんのメンタリティに武藤遊戯さんを感じてしまい…。  
そんな彼なら友との最後の別れ際、覚悟の言葉を告げて去ってもおかしくないのでは?  
なんたって”大好き”ブルーノちゃんのDですからね!!!  
と、誇大妄想オタク特有の拡大解釈でお届けさせていただきました。

でもvs遊星戦を経ずゾーンさまに直接「キミを救おう」というのは  
セルフ解釈違いです(は???)  
ゾーン自身を救いたいと本人に直接言えるのは  
あのvs遊星戦の結末の末に見出した後のほうが燃え&萌えるよ〜〜涙涙  
などと思っていました。そう、この漫画を描いた時点では…。

( ※のちにDLの  
ゾーンvsアンチノミー戦の台詞で  
KONAMI様に頭を殴られ、  
「不滅の遺伝子」でまた大暴れます )









むしろ  
オレたちのほうが  
助けられている



負い目に  
思わないでくれ

そんなの  
救った内に  
入らないさ



思い出せ  
自分の使命を

ぜんぶ思い出した  
わけじゃない

でも

確かに  
誓った

彼がボクを  
救ってくれたように

ボクが  
彼を救うと

今度はボクが

「今度はボクが」 2025.09.17.

---

ブルーノさんに石ノ森ヒーロイズムを感じています。  
(仮面・バイクに乗る・利他的自己犠牲精神・人間じゃない・秘めた使命持ち)  
あとはジャンク～のみなさんみたいにたなびくマフラー巻いてれば  
完全に仮面ライダー・ブルーノですよ！

ところで平成初期の名作「仮面ライダーアギト」の主人公・  
津上翔一さんはなんと、外ハネの茶髪とチャーミングな笑顔が素敵な  
“記憶喪失の青年”で…  
(しかも海で発見されるしヒロインのお家に居候して主夫するし本当の名前じゃないし…)

ブルーノさんが“あの結末”を迎えなかったら、  
ブルーノさんが“ブルーノのまま”でいられたら…？  
そんなひとつのifを垣間見れる気分になれるので、もしご興味あれば  
「仮面ライダーアギト」全51話、よろしくお願ひします！



未来を救う

そして  
キミを救おう

確かに  
そう言った

被造物が…

創造主を  
救う？

オリジナルの—

いち複製に  
過ぎない  
あなたが

この私を

あなたの原型は  
死後 私の  
しもべになると  
誓ったのですよ

主の従属たる  
手足が

私の計画を  
信じないの  
ですか

アンチノミー！！

ゾーン！！

一度はキミに  
救われた  
ボクの命だ

キミが  
望むなら  
歯車にだって  
なるよ

本当の  
あなたは



ゾーン

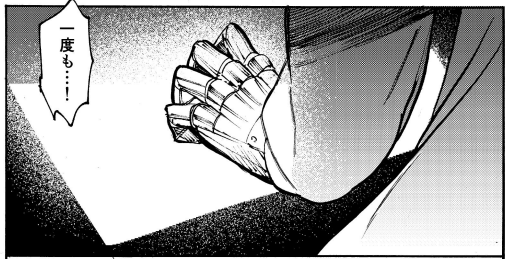
いつの日か必ず  
世界を救ってくれ

そのためなら  
ボクは  
キミのしもべとなって  
働こう！

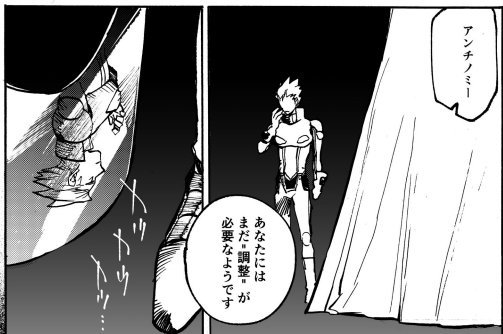
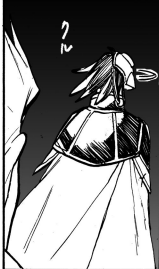
私を  
救うなど



そんな言葉



一度も……！





「利己的な遺伝子」?



遺伝子の本分は  
自己複製を繰り返して  
生き残ること

遺伝子にとって  
私たち個体の  
身体はあくまで  
生存機械

生命を次  
さらにその次の  
世代へとつなぐ

いわば  
「遺伝子の乗り物」  
だ……



なるほど

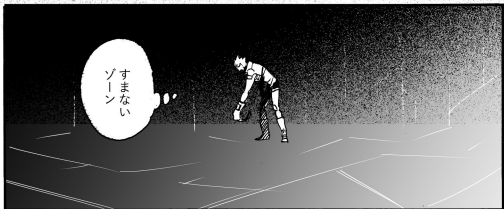
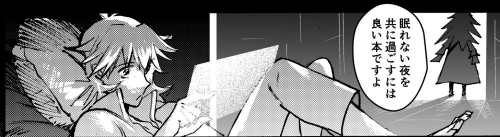
詳しい理屈は  
わからないけど……



はい

20世紀の  
動物行動学者が  
著した  
進化生物学の  
タイトル——

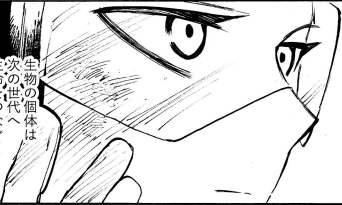
利他的に見える  
生物の行動を  
遺伝子のスケールで  
再解釈した名著です





でも  
これは

ほかでもない  
ボク自身が  
決めたことだ



「遺伝子は  
生き残るために  
自己複製を  
繰り返す」

生物の個体は  
次の世代へ  
生命をつなぐ  
「遺伝子の乗り物」に  
過ぎないー



なる

この  
機械の複製体こそ

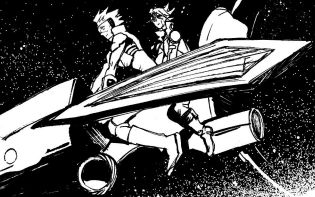
まさに  
「複製体」  
遺伝子の乗り物だ

自己複製と  
エラーを  
吐き出しながら

過去から未来へ  
乗り継いでいく

ボクもまた  
ひとつの方舟

たったひとつの  
希望を乗せて



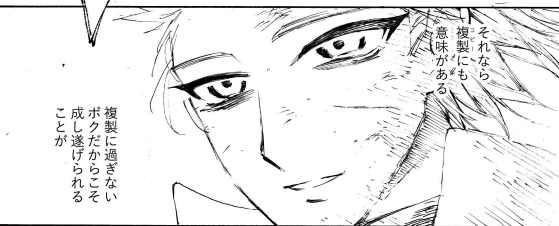


対岸まで運んで  
乗り捨てる舟



ブルーノ!!

ブルーノ



それなら  
複製にも  
意味がある

複製に過ぎない  
ボクだからこそ  
成し遂げられる  
ことが

遊星…

Altruistic vehicle

不滅の遺伝子

## 「不滅の遺伝子」2025.11.26.

デュエルリンクスのゾーンさまvsアンチノミー氏の問題のセリフこと  
対戦専用台詞に触発されて描きました。

デュエルリンクスの「キミを救おう」発言には本当に度肝を抜かれました。  
あれはあくまで”おそらく5D'sの面々の記憶や記録をもとに再現された  
”ブルーノ/アンチノミー氏の台詞なので…本当にゾーンさまには言っていない、という解釈です。  
アレ！？セルフ解釈違いじゃないですか？！！？そうなんです！！(解説：林陵平)  
(サッカーオタクにしか通じないネタやめな～)

あのゾーンを救いたいという台詞は  
”遊星たち5D'sと出会ったこと、本編後、デュエルリンクス内での遊星との再演を通じて言えるようになった”  
ほうが絶対エモい、そのほうが絶対”文脈”がんですよ。  
…でも遺伝子論を応用すれば複製時のエラーってことで  
そういうこと言っちゃった変異個体がいてもよくない？！！！！？！  
という名著いっちゃかみ斜め読みの悪いオタク仕事が発生しまして…往生際が悪い！

タイトルは、作中でも語ったりチャード・ドーキンス氏の「利己的な遺伝子」の、  
編集者が考えた別タイトル案からいただいております。

あまりにもタイトルと語り口から誤解されすぎてドーキンス氏は後悔してらっしゃるらしく、  
「利他的な乗り物」なんてタイトルよかったかも…と述べられてて、  
それはそれで(遊星王5D's的な意味で)めちゃくちゃよいなと思います。  
「利己的な遺伝子」、手元にあるのが40周年記念版なのですが  
21世紀の時点で「生物学の古典」扱いでビビります。著者のドーキンス氏、ご健在ですよ！  
ドーキンス氏が序文で嘆いている通り、  
「利己的な遺伝子」というやや煽動的なタイトルやミームという言葉も意味も氏のもとから離れて語られているのが  
まさにミーム(自己複製子)的だなと…。

この本自体が版を重ねるたびに生き残ってきた、まさに乗り物を変えながら生き残る遺伝子のようなのだと思います。  
ちょっと私の要約やこの漫画に当てはめた内容が本当に正しいかは自信ないどころか  
怒られそうな引用してる気がするので、ご興味ありましたらぜひ！

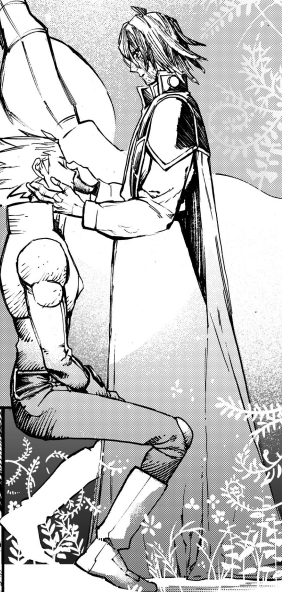


リファレンスは言わずもがなミケランジェロのピエタ像です



ゾーン

ボクの眼に  
何か…  
異常でも？



いえ

ジョニー

正常に  
機能して  
いますよ

アンチノミー

あなたの  
星のように輝く瞳は  
再現できなかった

何度試しても

ロベスピエールは  
ただか国王の首を  
跳ねただけに過ぎない

カントは  
神の首を  
跳ね飛ばした

アンチノミー対話篇：  
名について

…と

書いたのは  
ドイツの詩人か  
後の学者だったか

キミは  
どう考える？

カントの子

アンチノミー  
二律背反よ

ええと…

哲学は  
さっぱりで

お手柔らかに  
お願いするよ

アンチノミー  
教授





キミに  
与えられた名は  
ゾーンの  
期待の現れだ

二律背反とは  
人間の限界を  
超越するため

人々がより良く  
生きるため  
紡がれた言葉  
なのだから

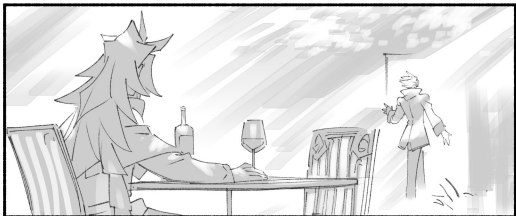


なんだか  
元気が  
出てきたよ

午後も  
頑張ろう！



ありがとう！  
パレードックス



狂人でも  
聖愚者でも  
科学者でもなく

ひとり  
の敬虔な哲学者の  
理性と  
道徳によって  
はじめて  
神殺しは  
成されたのだ

神は一度  
死んだ

そこに  
神殺しの葛藤も  
矛盾も存在しない

「なぜ  
人間は神の存在を  
要請するのか」

問うそのものを  
転換させることで

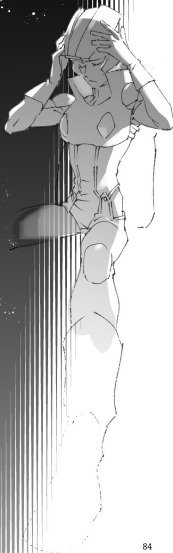
神を殺しながら  
生かすことに  
成功したのだ

彼こそ  
まさしく  
実践理性の  
体現者

感嘆と畏敬の念で  
心を満たす  
ふたつのもの

はるか  
天上の星々と

内なる道徳律とを  
繋げた








あなたは  
きつと  
愛されて  
育ったのね

—そ



れは  
どういう意味だ  
エウレア

それだよ  
アポリア

「なぜ？」

「どうして？」

「なんで？」

ふふ

そうやって

いろんな人や  
モノに

世界に  
問いかけることは

愛されて  
はじめて  
できることだから

まだ  
わからないな

むむ……

愛と問いが  
どう繋がるのか

意外と  
勇気が必要な  
ことよ

心当たり  
ない？

「どうして  
空は青いの」

「なんで  
昆虫たちは  
働くの」

「パパとママは  
どこで  
出会ったの？」

—そうやって



…なるほど



答えの出ない  
問いを求めて

ご両親を  
質問攻めした  
覚えは？



ね



小僧の  
好奇心は  
恐ろしい

父も母も  
根気よく  
答えてくれたな…



必ず  
返ってくる  
信じて  
問うのだから

ヒトに  
モノに  
世界に



問うことは  
愛すること

そして  
愛されていないと  
できないことだよ



—なら



エウレア

オレからも  
ひとつ問いを

なあに？



この  
問答は



オレたちが  
愛し合っている  
証拠だと

そう  
自負して  
いいか？





参ったな

一本  
取られちゃった

キミが  
言い始めた  
ことだぞ  
エウレア



いま  
目の前に  
キミがいる

そうよ  
私がいる

オレに  
問いを与え  
問うべき  
対象が



オレは  
問いかける先を

愛する  
父と  
母を失って  
絶望していた

だが



キミまで  
衰って  
しまったら  
問う先を

愛を  
喪ってしま  
う  
憎んでしま  
う



愛すべきものを  
無くした世界に

問う価値など…

アポリア対話篇：

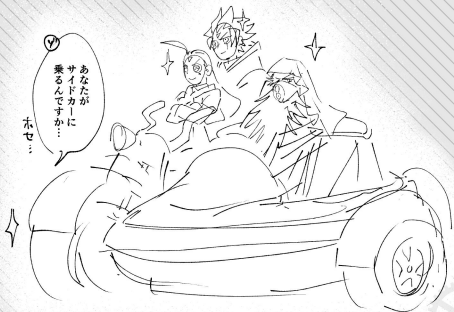
愛することは問うこと

# ここからゆるめの単発漫画群

合体もいいけど  
三人でバイク乗るのも  
かわいくなって…

④  
あなたが  
サイドカーに  
乗るんですか…

ホセ…







後処理は  
キミに任せた

パツ……  
……(絶句)

ボクの話  
聞いてた?!

ボクは  
フーンに  
寝るように  
言っただけで  
頼んだのであって

科学者同士の  
コミュニケーションに  
期待したんだよ!!

こんな  
カブくで  
眠らせるなんて

やかましい!!

だいたい  
この私が!!

好き好んで  
彼を気絶させて  
いるとでも!?

時間! 食事!  
室温! 環境!  
設備! 知識!

あらゆる  
方面から  
検証し!

結果!

第三者の手による  
強制電源OFFこそ  
最善の道と  
至ったのだよ!!

一見  
間違っているように  
見えた今の攻撃

だが  
これこそが  
大いなる正解!!

これだから  
温室育ちの  
プロ決闘者は……!

私とて  
不本意なのだよ  
この実験結果は!!

自分が  
手を汚さずに  
済んだのを  
いいことに!

私の良心を  
咎めるのは  
やめたまえ(涙)

ご……ごめんよ  
パラドックス!

科学者って  
そんな  
怖い集団  
なの……?



# 万国共通修理法



ああ  
ごめんよ  
あとでボクが  
修理するから



この  
エンジン  
故障か



パラドックス



※ 叩けば  
直るだろう

※意訳「この程度、キミの手を煩わせるまでもない」



ゾーン…

答えて  
もらおうか



なぜ  
盛った？

我々の  
身長を…

私が縮んだ  
だけです

縮…??

時械神に  
誓って十

盛って  
いません

いいえ



過去の私が  
護れなかった…  
私の愛した  
すべてを

父と  
母を  
恋人を  
そして  
仲間を

三つの絶望を  
味わった私自身すらも  
護れるような力を

獅子の如く  
強靱にと…  
ゾーンに  
願ったのだ

アポリア

少し  
屈みたまえ

キミは  
本当に…

師が…  
アポリア…

アポリアの  
擬似末っ子  
パワーが発動し  
ゾーンへの審問は  
穩便に終わった



じいちゃん

アンチノミー  
その服装は？

ゾーンが  
仕立てて  
くれたんだ！

ほう  
偵察用か

ありがとう  
ゾーン

なんだか  
懐かしいよ  
子どもの頃  
よくこんな服を  
着せられたから

髪を下ろした方が  
似合いそうだ

どうかな？

ええ  
その姿なら  
不動遊星の時代の  
大衆にも  
馴染むでしょう

遠い過去に  
ひとり  
記憶を  
抹消されても

どうか  
人の良い  
あなたが  
寂しい思いを  
せぬよう

② Show

もし謎Dさんが  
記憶喪失にならずに  
5D'sと合流したら

ちょいちょい街中で  
秘密行動している謎D氏の姿

何の  
目的で?

?  
オレたちをか

なんか!  
着けられて  
ぬーか?



三皇帝の手先やらゴーストやら  
謎のゴロツキから5D'sを守る(物理)などして  
邂逅→正体バレ→記憶喪失?!→使命??  
ほなウチで預かるか…な展開も見てみたい

とくはしる

— in ホ・ホ・ホ —



…何の  
ことだ?  
人違いだろう

?  
あなた  
以前パーティーの  
駐車場で会った…?

何?  
自分の名前が  
わからない?  
記憶も??

⑧  
サンクラス  
一緒じゃん!

⑦  
演技  
ヘタだな  
こいつ

⑥  
うちで  
面倒見るんじや  
ない?

⑤  
キミたちの  
知っている  
Dホイラーとは  
関係ない!

ええっ

ボクの記憶を  
消す?!



はい

イリアステル  
としての  
記憶を消去し

チーム5D'sの  
導き手となって  
もらいます

いきなり  
正体不明の  
人間が  
現れても…

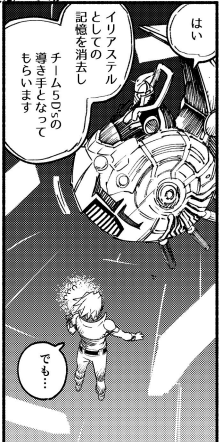
信じて  
もらえるかな？

問題  
ありません

不動遊星が  
クリアマインドを  
習得できるよう  
あなたの振る舞いを  
「調整」します



でも…



は〜

私が計算した  
シミュレーションを  
見せましょう

ゾーンの真意は  
わからない

グゥー





ちょっと羨ましいな

〇〇〇

記憶喪失のボクがー

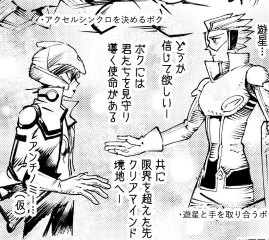
かってゾーンがボクを助け導いてくれたように

遊星を守るなんて

ボクはガブナーを召喚!

誰だ?!

・アクセルシンクロを決めるボク



遊星...

どうかが信じて欲しい

ボクには君たちを見守り導く使命がある

共に境界を超え先クリアマインドの境地へー

・遊星と手を取り合うボク

※画面はアンチノミー氏のイメージ映像です。実際とは異なります※

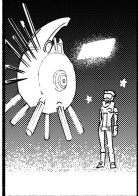


こちらがシュミレーションの一例ですね

ちょっと羨ましい

!





なんか…  
随分ハード  
ボイルド  
だね??

不動遊星の  
趣味です  
モデルは  
ありません



この既視感…  
蘇る生前の記憶

ゆ、  
遊星

もう少し  
スピードを  
落としても…

風を感じる！  
研ぎ澄ませ！

その程度では  
クリアマインドの  
境地へは  
至れない！

英雄直々のスパルタコーチング 叱咤激励

どうした  
ジョニー…  
それでも  
フロドホイクラカ  
甘ったれるな

へバツている  
暇はない！

立て！  
ジョニー!!

アームズエイド  
シマースタ

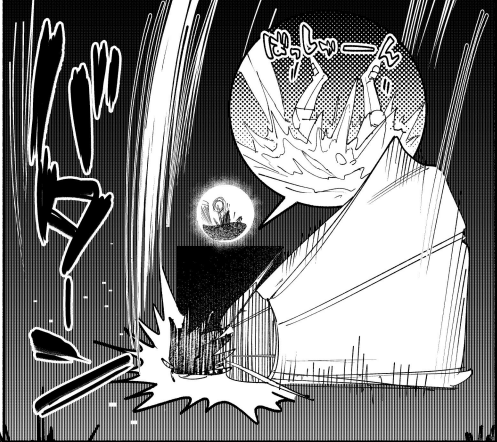


努力の結果クリアマインド習得して  
英雄にGoodBoy…されるジョニー氏を描くまで  
死ねねえ~~~~!!!!!! 涙涙涙  
とか言いながら描いてたラフ

色塗ってブレマにしたかったな…

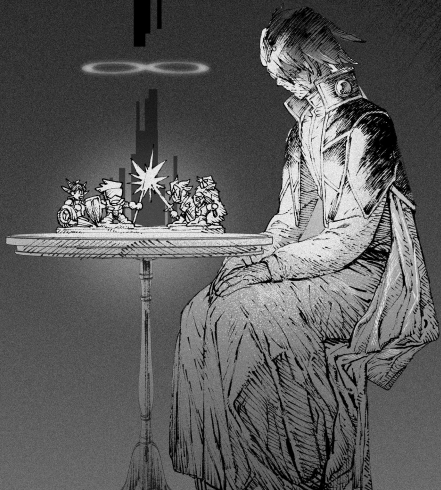






ゾーンさまが考えたさいきょうの不動産屋専属コーチ・謎Dが  
まさかの記憶喪失オリチャー(?)入った時はさすがに焦ったと思う妄想

原作初期の間パクラvs闇遊戯TRPG戦、闇遊戯さんの振った二つのダイスがぶつかって  
出目の結果が変わるシーンが好きなんですけど、ブラッドvs謎Dにはその構図を感じます。



ゲームマスター・Z-ONEさまが書いた三皇帝vs謎D+チーム5D'sの脚本を見てみたかった  
ホントどういとお気持ちでこの絵面を眺めてたんでしょうね…

3年F組 不動先生 ☆



遊戯王デュエルリンクス  
「クリアクリア・マインド 戦律のアンチノミー」  
「RAD DUEL」最後の人類無限界ゾーン」  
ってだいたいこんな感じ！  
こんな感じでしたよね？（それはどうかな？）

遊戯王デュエルリンクス

（すみません）

Amazing Grace!  
I once was lost but now am found  
was blind now I see....

品良



三皇帝のみなさん  
お名前が三大テノール歌手由来なの  
品が良すぎます神神涙涙

禰さまのためにお歌を捧げましょうね…涙

※このへんから緩やかに一枚絵コーナーが始まります※

# 【Sin】新規おめでとうございます

「HERO's COLLECTION」に収録されてるの  
良いつねね…。

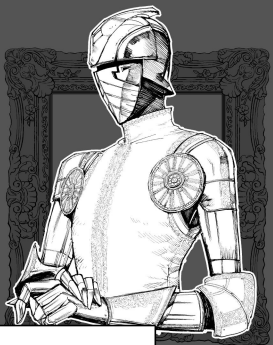


「make magic」

初めて聞いたときはビックリしたけど  
よくよく聞くとパラさま&  
未来組の歌にしか聞こえん…になりました



どうする？  
科学者二人組が揃って  
肩出ししてたら：



って

2人とも  
寒くないの  
かな



夏のイベント会場の暑さにやられて  
表題の不安を検証した落書き×2  
どうしようもそんなものは、  
最初からありません。

\\ オレたちの絶望はこれからだ! //



# イリアステル滅四星


両親と恋人を喪い絶望してもなお歩みを止めなかったアポリアさんに  
鬼柳京介さんの"魂"を感じる…感じませんか？

#91話

「タッグデュエル 鬼柳・遊星VSロットン」

伝説の予告より

(すみません)



「汝の人格の中にも他のすべての人の人格の中にもある人間性を、汝がいつも同時に目的として用い、決して単に手段としてのみ用いない」というようなふうな行為せよ」。

イマヌエル・カント

「人倫の形而上学の基礎づけ」

“すべての理性的存在は自他を常に目的そのものとして扱い、手段として使用してはならない”

二律背反の生みの親・哲学者カントの倫理学で有名な「定言命法」のひとつですね。「未来を救うため」に英雄・不動遊星の人格を蘇らせたゾーンさまの苦しみを思うと、この人格・人間性云々の一文にカントの思想の射程と視座の広さを感じられます。

人類を救うために他者の人格をコピーすることは果たして定言命法に反するのかわかりませんが、もしかしたら他でもないゾーンさま自身の人格を保護するためにこの定言命法は存在しているのかなあ、なんて思いながらシュースタ握り潰すシーンを見ていました。お辛い…。

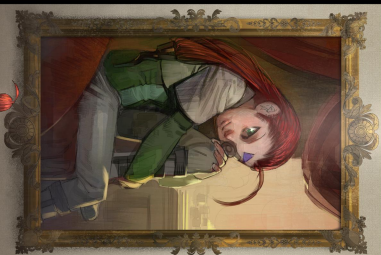
「たとえば、ある男の肖像があるとしよう。

八歳のとき、十五歳のとき、十七歳のとき、二十三歳のとき、とまあ何枚もあるとしよう。

これらは、その一枚一枚がそのときそのときの肖像なんだが、

ずらり並べてみると、四次元を三次元で表わしたものと違っていいんじゃないだろうか」

(H・G・ウエルズ「タイムマシン」岩波少年文庫版より引用)





夢みるように目覚めて



春にして君を速く離れ

## 編集後記

初めましての方もいつもお世話になっている方もこんにちは！どこにでも出てくる00年代インターネットのおはげ、Y(わ)じと申します。まだまだ番組の途中なのですが台割の都合で急な自己紹介と編集後記の展開、失礼いたします。

攻撃は弱いが大変：な遊戯王を代表するモンスター・レベル1開属性アンデット族「ワイト」よろしく、これまで描いた細々したものを寄せ集めて戦うデッキのつもりで構築しました。改めて見返すと、内容の寒暖差が激しくて手札事故は免れなさそうですが：。

十八世紀プロイセンの港町・ケーニヒスベルクの「散歩する老哲学者」カントが没してから、二百年以上の歳月が過ぎました。

生まれ故郷から離れることなく、感性と悟性を両手に永遠平和の世界を思索し続けたカントの言葉は、むしろ現代においてこそ輝きをいや増しているように思います。カントの築いた偉大な思想の建築物が決して古びないように、00,10年代を代表するアニメーション「遊戯王SDGs」が描いた道德律もまた、私たちの頭上にある星々のように輝き続けるのではないのでしょうか。

それほどの射程と普遍性を備えた素晴らしい作品であったと、いちファンとしてその魅力を少しでも再確認できる場を作れたならば幸いです。いつか「遊戯王SDGsでわかる！カント哲学入門」という漫画なり入門本を書いてみたい、というかそれを載せられなかったのが心残り……。これは次回以降の宿題に！

最後に、素晴らしい発表の機会を授けてくださった未来組webオンライン主催さまに深く御礼申し上げます。本当にありがとうございます！

それでは私は書き下ろし小説「星の方舟」と、表題の漫画「純粋理性の子どもたち」を場に伏せて、ターンエンドとさせていただきます。お楽しみはこれからだ！

### 【参考文献・資料】

カント関連著作

『純粋理性批判Ⅰ』中山元 訳（光文社）

『純粋理性批判 上・下』石川文庫（筑摩書房）

『実践理性批判』波多野精一、宮本和吉、鎌田英雄 訳（岩波書店）

『プロレゴメナ』人倫の形而上学の基礎づけ』土岐邦夫、鶴山雪陽、野田又夫 訳（中央公論新社）

『DQの名言』カント 純粋理性批判』西研（ZET出版）

『カント入門』石川文庫（筑摩書房）

『はじめてのカント』純粋理性批判』竹田青嗣（講談社）

『完全解説カント』実践理性批判』竹田青嗣（講談社）

『ドイツ古典哲学の本質』ハイネ（岩波文庫）

『西洋哲学史 近代から現代へ』熊本純彦（岩波新書）

『ゼノン 四つの逆理』山川偉也（講談社）

『神のいなな遺（佐子）周年版』リチャード・ドーキンス（紀伊國屋書店）

『神のいなな世界の歩き方』リチャード・ドーキンス（早川書房）

『生物はなぜ死ぬのか』小林武彦（講談社）

『魔法の世紀』落合陽一（PLANTS）

『トコトンやさしい歯車の本』門田和雄（日刊工業新聞社）

『達人プログラマー』デイヴィッド・トーマス、アンドリュー・ハント（オーム社）

『リーダブルコード』ダスティン・ボスウェル、トレバー・フォッシュ（オライリージャパン）

『鋼鉄都市』『ロボットの時代』アイザック・アシモフ（早川書房）

『タイムマシン』エ・の・ウェルズ（岩波少年文庫）

- 星の方舟 -



- Nice guys finish first -

「ブルーノ、この行間はなんだ？」

プログラムの最深部に潜んでいた謎の“広大な空白”は、突如現れた深淵のよう  
に遊星の眼前に広がった。明らかに不要な大量の空白行でプログラムが埋めら  
れている。遊星の視線は漆黒の開発画面に釘付けのまま、ブルーノに声をかけ  
た。

ちようど飲み物を取りに席を立った共同開発者のブルーノが、足を止めて遊星  
に振り返る。

「ああ、仕上げで使いたいんだ。最後に魔法をかけたくて」

空けておいてくれるかな——と微笑んで、記憶喪失の魔法使いは空のマグカッ  
プを片手にキッチンへ消えた。

## 星の方舟

-Nice Guys finish first-

魔法。

確かにブルーノの書くプログラムは、魔法のように動作する時がある。WRGPの予選を控え、Dホイールのエンジンプログラムの改良にひとり勤んでいた遊星にとって、ある日彗星のように現れた記憶喪失の魔法使い——ブルーノとの出逢いは、幸運なものだった。

プログラミングには個性が出るという。ほぼ独学、実践と失敗を繰り返してプログラミングを学んできた遊星にとって、初めての共同作業者・ブルーノの書くコードは驚きの連続だった。彼のコードには“遊び”がある。一が十を解決し、複雑に絡み合った百の糸を一本に纏めあげ、ときに回り道をして最短ルートを導

き出す。遊星が知らない——それどころか、記述したブルーノ自身もなぜ出来たのかもわからないまま、数日頭を悩ませていた箇所を見事に解決してみせる。

そんなブルーノの鮮やかで摩訶不思議な設計技術を隣で目撃するたびに、遊星は密かに感銘を受けていた。——まるで魔法のようだ、と。

その魔法使い——ブルーノが、WRGPに挑むチームの大仕上げに、プログラムへ魔法をかけるというのだ。

マグカップになみなみと注がれたコーヒーを片手にブルーノがキッチンから戻ると、遊星は先ほどの会話を繋ぎ直した。

「それは楽しみだな。どんな魔法カードが伏せられたのか」

魔法使いが残した巧みな言葉遊びに合わせて、遊星は駆け引きを始めた。決闘と同じだ。相手が切り出したカードに乗せて、こちらも手を打つ。相手の手札、デッキ、伏せられたカードから、情報を少しでも多く引き出すために。

だが、そんな遊星の計略に応じる気はなかったようで、ブルーノはやんわりと遊星へはにかみ、マグカップのコーヒーを一口啜って画面に顔を戻した。

魔法のタネが割れては魔法使いでいられない。対戦相手の方が上手だった。これ以上ブルーノを深追いしたところで煙に撒かれるだけだろう。遊星はデスクトップに顔を向け直し、ターンを終えた。

「私には全部、魔法に見えるわ」

ダイニングテーブルで数学と物理の教科書を広げていたアキは、先程から二人のエンジニアの間で繰り広げられていた会話を拾い、悩ましげに溜息をついた。おそらく、二人の会話だけでなく目の前の問題文にも「魔法」がかけられているように見えるのだろう。かつてサイコデューエリストの「黒薔薇の魔女」と恐れられたとは思えないほど棘の抜けた、歳相応の女学生の言葉である。

確かにプログラムの知識や技術を持たない人々にとっては、コードに刻まれた大量の文字列はまるで魔法陣のように見えるだろう。知識として、普段見慣れているはずの文字や記号の文意が一切読めないのだ。にも関わらず、不思議とそれらの文字列によって様々な動作が制御・実行される。タネさえ分からなければ、魔法と言っても差し支えない。

「確かに、『高度に発展した科学技術は魔法と区別がつかない』なんて、昔から言われているからね」

すかさず当の魔法使いがフォローを入れる。確か、昔のSF小説家の言葉だったろうか。技術が広く人々に共有され再現可能な設計図なら、魔法は特別な人々にしか唱えられない魔法陣といったところだろう。

つまり技術と魔法とは、具体と抽象の差なのかもしれない。具体と抽象の間を往来し、相互の言葉を自在に翻訳するブルーノは、まさしく技術者であり魔術師でもあった。

あまり専門的な話を繋げるつもりはないのか、ブルーノは自嘲っぽく言葉を選んで続けた。

「コードを打ってるボク自身、どうして動作してるかわからないときもあるからね」

「なんだそりゃ。仕組みを分かかってないのに動かせるなんてことがあんのか？」

配達の仕事を終え、夕食の準備を始めたクロウが会話に割り込んだ。そのクロウの忙しない動作からは、エンジニア二人とアキが話していた元々の文脈を押さえているは分らない。

これには返答に悩んだブルーノが、少し唸る。遊星もブルーノの「魔法」を間近で見ている身として助け舟を出してやりたかったが、どうも話が拗れそうである。ブルーノがそうだ、と先程手にしていたマグカップを手に取って説明を始めた。

「プログラムに限らず、たとえばこのマグカップも。どうやって大量生産されてボクたちの手元に届けられるか、一から説明するのは難しいでしょ？ ボクたちの日常は、既に魔法で彩られているんだ」

「冷蔵庫ってすげーよな。モノ仕舞っておけば勝手に冷えるし」  
食材やボウルをシンクに広げているうちに、どうやらクロウの興味の範疇から離れたらしい。一応、彼の目の前の冷蔵庫もまた、魔法道具のようなものだと言いたかったのだろう。

一足先に宿題を終えた様子の龍可がシャーペンを机に置き、遊星とブルーノに話を戻した。

「きつと二人にしか読めない『秘密の呪文』を書いてるのね」

精霊の声が聞けるといふ少女は、不思議と実感の込められた声色で彩る。

それまで口を開かなかったジャックが、コーヒーカップを片手につまらなさそうに鼻を鳴らして会話に乗り込んだ。

「なるほど。魔術師たちは俺たちが読めないのをいいことに、夜な夜な怪しげな魔法陣を書いているわけだな」

何をコソコソと書かれたものか分かったものではないな、とジャックは嫌味っぽく付け加える。

「それはどうかな」

「なんだと？」

自らが優位に立つ決闘さながら、からかうように遊星は幼馴染の挑発に乗った。その回答が意外だったのか、ジャックは改めて視線を遊星と合わせた。見えない火花が飛ぶ。

「じゃあ、完成してからのお楽しみだね！」

遊星とジャックの応酬が続きそうなところに、龍亜の無邪気な笑顔がはじけた。結局のところ、碧い髪の少年が出したカードがこの場では一番強く機能したようだ。遊星は静かに頷く。

とにかく遊星とブルーノには、まず目の前のプログラムをWRGP前に完成させる絶対的理由があるのだ。記憶喪失の魔法使いが最後の大仕上げに伏せた「魔法」をお披露目してもらうためにも。

ポツポタイムには二つの顔がある。

昼は絶え間なく外の広場からも街ゆく人々の声や鳥の囀りが聞こえ、来訪者と仲間の往来で賑やかな空間が広がる。だが一度太陽が沈むと、リビングやガレージは色鮮やかな風景を忘れ、静寂が訪れていた。

シャワーを浴びて作業机の前に戻った遊星は、デスクトップのスリープモード状態を解除した。普段なら、この時間でも隣の席で作業しているはずの共同開発者の姿が見えない。席に着いた遊星は作業途中のファイルをざっと見直し、ブルーノが残したメモを見つけた。

昼時、仲間たちとプログラムの秘密の呪文——とは言っていたが、実はプログラム知識がない彼女らでも明確に読める箇所がある。

コメント機能で書かれたメモだ。

〱 ごめん遊星、今日は先に寝るね

〱 明日起きたら先はボクが埋めておくから！

コーディングの原則として、プログラム内にこのような余計な私的コメントを書くのは望ましくない。使う場合も、厳密なルールを決めて「必要最低限」活用されるべきものである。実際、遊星とブルーノは元々チャットや別の共有メモを利用して、コードの進捗状況や問題点の洗い出し、情報共有などを行っていた。それがいつの間にか、頻繁にプログラム内に直接二人の「会話」が書かれるようになった。

遊星はログをスクロールさせながら「感染源」を探した。きっかけとなったブルーノのコメントが、これだ。

〱 クロウとジャック、本気で決闘したらどっちが強いんだろう？

確か、作業中にクロウとジャックが口喧嘩を始めた時にブルーノが打ち込んだものだ。それも、二人の口喧嘩に眉を顰め、深刻そうに紡がれた彼の文字列が、この内容だったのだ。

さすがの遊星もブルーノのこの書き込みには仰天した。当然、遊星もコメントアウト機能を利用したことはある。ただし、それは自分が分かるように問題点や書き途中の箇所、注意点など必要最低限の内容だ。このブルーノの一手は、遊星の頭の中に確固として存在していたはずのプログラミング作業の概念を、頭から書き換え”てしまうほどの衝撃だった。

リアルタイムで書き込まれたブルーノの文字列に驚きながらも、長年二人の幼馴染として過ごしてきた義務感に駆られ、遊星は「コメント」を返した。

〓 これまでの勝敗数を自動計算してくれるマクロを組んでおけばよかったな  
これに対するブルーノの回答も鮮やかなものだった。

〓 今度、二人のケンカが始まったら決闘で決着つけてもらおうか！

こうして、魔術的儀式の呪文の中に二人の生きた言葉が混ざるようになったのだ。

このコメントを利用した会話は、文字通り「内緒話」をしているような面白さがあった。ブルーノの茶目っ気に吊られるままに、つつい、遊星もプログラム内でブルーノと会話することが増えた。

開発上のメモや覚え書き、質問、進行の相談といった開発上発生する必須のやり取りから、新しいカップ麺の感想、工具の買い出しの相談、その他日常生活の報連相に雑談から独り言のような呟きまで。専門職の玄人が見たら、間違いなく顔を顰める画面だろう。

普段から隣で作業しているのだから話しかければよいのだが、昼の大所帯のポツポツタイムではそうはいかない。前述の通り、背後でジャックとクロウが言い合いを始めることもあれば、龍亜と龍可の宿題の面倒をアキが見ていることもある。今回のように片方が仮眠などで席を外した場合に書き置きを残すこともあれば、「何でも屋」の遊星が外に貸し出しされることもある。

そこで、コード内に直接コメントを書き置きしたり、リアルタイムで書き込む——儀式は、意外にも二人の間で続いていた。

遊星は再度、コードの最深部までスクロールし、大量の行間に潜む深淵を眺めた。おそらく先日のブルーノが宣言した伏せの魔法カードとは、この「コメント機能」を活用したものだろう。

出題最初、遊星はプログラム制作者の署名かと推理した。これまで一人で全部コードを書き上げ、そして共同制作することもなかった遊星には縁遠いものだったが、今回ばかりはブルーノと共に開発したものだから無記名のまま最後のエンターキーを押すわけにはいかない。だが、どうやら署名はファイルの冒頭に記すのが通例らしい。ならば署名の類ではなく、別の線だろう。また、最後の最後に断りもなく別のコードを挿入するのも現実的ではない。となると、終行に刻んでも問題ないものといえば——コメントではないか。問題は、その内容だ。

いずれにせよ、ブルーノの魔法は遊星の想像をはるかに超えたものになるだろう。それこそ、チームのWRGP優勝を確実にしてくれるような魔法の呪文が。

明け方、外ハネの蒼い髪の毛を朝日に照らされたブルーノが寝ぼけ眼のままリピングに現れた。互いに短くおはようと挨拶を交わすなり、今日も二人は黙々と作業を始める。変わらないポツポツタイムの朝、鳥のさえずりが耳に届き始める。

続いて出勤のためにクロウがリピングへ顔を出した。支度を早く終えたのか、欠伸をしながら遊星が座る椅子の背に肘を乗せ、開発画面を見つめる。

「クロウ、今日は早いな」

「魔法使いサマの術が見たくて」

普段遊星とブルーノが作業に熱中していても割り込まないクロウだったが、珍しく画面の文字列をぼんやりと眺める。昨日、会話の途中で切り上げてしまったクロウなりの気遣いかもしれない。

「だそうだ、ブルーノ」

「プレッシャーだなあ。魔法使いなんて……。ボクが魔法を使えるのは、遊星のおかげでもあるんだよ」

謙虚な魔法使いは共同開発者でもある遊星へのリスペクトを怠らない。

「言ってくれるな。ブルーノの書いたコードは本当に魔法のように動くんだ。オレが下手に修正したら、壊れてしまうんじゃないかと不安になるくらいだ」

冗談混じりに答えた遊星だったが、本音だった。ブルーノの芸術的なコードに、いくら修正とはいえ自分が手を加えるのは惜しい。それがたとえ、プログラムがより良く稼働するために必要な改良だったとしても。それほどに、遊星にとってブルーノのプログラムはただの文字列ではない付加価値を持っていた。

「そんなことはないさ。プログラムは遺伝子みたいなものだよ。色々な人の手が加わるからこそ最適化して、生き続けられるんだ」

「なんかまた小難しい話が始まったな」

ぼーっと話を聞いていたクロウが声を挟んだ。トリックスターを自称するだけあって、クロウの嗅覚はおおむね正しい。

「遺伝子は自己複製を繰り返す。すべての生物個体は遺伝子というプログラムを運ぶための乗り物、方舟みたいなものだね」

ブルーノの独特な持論が続く。これは彼のオリジナルの言葉だろうか？

「そうして何度も手を加えられ、推敲されて生き残った遺伝子……プログラムを乗せて走るDホイールは、正に『遺伝子の乗り物』とも考えられないかい？」

「遺伝子の乗り物か……」

ブルーノの言い回しを遊星は脳内で噛み砕く。身体は遺伝子を守るための外壁、という意味なのだろう。まるで遺伝子そのものが本体で、乗り物である身体は遺伝子の端女というように。

「なら、オレたち人間は」

「そう。ボクらはみんな、*“利己的な遺伝子”*の乗り物なんだ」

生物は、利己的な遺伝子の乗り物。

*“利他”*が服を着て歩いているようなブルーノからは程遠い言葉が出て、忙しなく稼働していた遊星の手が止まった。遊星はブルーノに向き直って、小さく聞き返す。

「利己的な遺伝子？」

「って、昔の科学者が言ってたんだって」

——あくまで比喻だけだね。

ブルーノなりのフォローなのかもしれないが、その笑顔の真意が遊星にはさっぱり読めなくなってしまった。

ブルーノは時折、理知的な例えを引用する。

遊星も独学なりに科学分野に手をつけてきたが、優星の手の届かない範囲にブルーノは詳しい。ブルーノは特に古典と称されるような科学——それも生物科学や遺伝工学など、その知識の幅は多岐に渡っていた。トップスである著名な科学者の父のもとに生まれたとはいえ、サテライト育ちで専門高等教育を受けたことがない遊星にとっては、ブルーノの口から紡ぎ出される言葉はどれも非常に興味深いものだった。特に、生きるため機械工学や技術的な手仕事に努力を注いできた遊星には、数歩離れた分野の話だったからだ。

だがこの遺伝子の例え話は、妙な違和感で遊星の心を揺さぶるものであった。

「ボクという個体が利他的に振る舞うことと、ヒトという種が生存し続けることは決して相反しないよ」

ブルーノが例え話に交えて生物の“利己的遺伝子”の講釈を始めた。地球が誕生してから数億年、巨大な遺伝子プールの中から自己の遺伝子を複製する個体が現れたこと。その中からさらに正確で、速く、大量に自己複製する個体が生存に有利だったこと。その自己複製の過程で生まれたエラーから別の生息が生まれたこと。利己的な個体のほうが利他的な個体よりほとんど優位に立つこと。それにもかかわらず、卵を産めぬメスの働きバチはなぜ命懸けで巣を守るのか……。

頭の中でブルーノの言葉を翻訳するのに忙しい遊星に変わって、痺れを切らしたクロウが短く尋ねた。

「んじゃ、オレたちに力を貸すのも？」

クロウの問いが鋭いのは、幼少の頃から生存戦略を試される世界で磨かれたからだろうか。

「ボクの中に内蔵された遺伝子というプログラムが、ヒトという種を生き残らせるためにキミたちへの利他行動を実行させているのかもしれないね」

言葉尻も表情も柔らかいが、ブルーノの紡ぎ出した言葉だけを切り取ると冷たく聞こえた。淡々と遊星とクロウに優しく説く、その姿だからこそ余計に一切の人間味を感じさせない。まるで、そう返答するように人間にプログラムされた“ロボットのようない台詞だ。初めて会ったあの日、「君たちの夢を叶える歯車の一つになるよ」と屈託なく微笑んだ青年とは、あまりにも程遠い。

遊星は話をそれとなく逸らした。この薄寒い、人倫の感性を裏切るような話を掘り下げた先に、一体何があるのだろうか？

「ずいぶん物知りだな。オレと会った時、遊星歯車の話をしてくれただろう」

——それに父のことも知っていた。記憶喪失なのに。

「え？　そうかな……」

先程までの機械的な返答は何処へやら、どこか惚けたような——記憶喪失なのだから仕方がないのだが——表情で空を見つめた。記憶喪失の魔法使いは技術者にも、優秀な導き手にも、穏やかでひょうきんな隣人にも変身する。

「でも、これは生物学？　進化生物学かな……。きつとボクの専門じゃないよ」  
それには遊星も納得できるものがある。「借り物の言葉」といえば良いのか、どこかの誰かから拝借してきたような、又借り特有の距離感があった。

「誰かから教わったのかもしれない」

そう言いながら遊星は手元の作業に戻った。これだけ腕利きのメカニックなのだから、記憶を失う前も——ブルーノはきつと優秀な誰かの力になっていたのだろう。人柄も良く、献身的。そんなブルーノが、人の輪の中で活躍している姿は想像に容易い。

二人が抽象と具象の世界を往来している間に、いつのまにかクロウは姿を消していた。自由なカラスは、今日も自らと仲間の生存を賭けて、配達仕事で地上を羽ばたいている。

遊星は今でも夢に見る。

WRGP予選をいよいよ数日後に控えた深夜、プログラムが完成したその日のことを。完成データを前にブルーノと肩を組み合ったこと、互いの功績を称え合ったこと、これまでの気苦労が報われた喜びを。待ち侘びた、魔法使いの「魔法」がいよいよ明かされるのだと。それとなく、スクロールする手が速ったこと。

謎の空白行を埋めた魔法――。

それは、遊星も思わず吹き出してしまふ「愉快な魔法」だった。意味のない文字列が大量に画面を埋め、ひとつの絵を描く――アスキーアートで書かれた

「TEAM 5D's」のロゴだった。

このチーム名は数日間に渡る協議の上、ジャックの提案が決定打になったものだ。赤き龍に導かれた龍の痣をもつもの、遊星たちシグナー五人を体現している。何の「D」か、「5」だけではなく龍亜やブルーノらを含めた意味や数字では駄目か——等、ブルーノもメンバーに混じって、決闘さながら言葉の応酬と協議を重ねた末に生まれたチーム名だった。

そのロゴを、ブルーノ自身が開発の側でこしらえた手打ちか、もしくはロゴ画像を取り込み、アスキーアートに自動生成するツールを使ったのだろう。魔法さながら、モニタ上の白黒のドットの世界によく再現されていた。

\* みんなで優勝しよう！

——と、ロゴの下部には、ブルーノのコメントが一行書き加えられている。

「あはは、本当は完全サプライズで仕込むつもりだったんだけど……。自分で『魔法』なんて言ってハードル上げちゃったから、緊張しちゃうね。……。どうかな？」

デスクトップの隣に並んだブルーノが気恥ずかしそうに頬をかいていた。あの時、遊星に“大量の行間”を知られるつもりはなかったらしい。この大胆なアスキーアートの仕込みといい、なかなかの胆力である。

遊星は微笑んでブルーノに答える。

だが、一行足りないな——と、遊星はエンターキーを押してさらに書き加え始めた。芸術作品は、評論家や学芸員といった人々が作者と作品の解説を書き添えるという。自分が作ったものでもないのに、他人の作品を。いつ、どこで、誰が、なぜ、何を、どのように——。遊星に芸術の良し悪しや作法はわからない。だが、その時だけは、彼らの役割と使命感がわかる気がした。眼前に広がる感動を、驚きを、魔法を、作者に代行して記録しなければならぬ。

\* Author : "D" — 大好きブルーノちゃんより — \*

遊星の瞳の奥に、今でもブルーノの表情が思い浮かぶ。この署名を代筆した時の、ブルーノの弾けんばかりの笑顔と、自分の名を呼んだ驚きと喜びの声を。静



「——以上が、問題の箇所になります……」

私たちの手ではこれ以上の改良は難しいようです——と、若い専属エンジニアは「絶対王者」たる主人、ジャック・アトラスに恐々とモニターに写るプログラム画面を見せた。

その若い技術屋の青年が次に何を提案するのか、普段のジャック・アトラスなら注視した上で彼の話の話を聞き、その後の判断と指示を下しただろう。

そのWOFのプログラムに描かれた、ある魔法使いの「魔法の文字列」が、初めて王の紫の眼に入らなければ。

王がモニター画面に釘付けになっているのを横目に、若いエンジニアの隣に並ぶプロジェクト・マネージャーが淡々と言葉を続けた。

「可能であれば、元々のプログラム制作者に該当箇所の問題をヒアリングできれば我々の手でも修正は可能になるかと思えます」「しかし」と一言置いた次の提案を続けた。それこそが王の配下たる彼らが通したい「本命」の提案だった。

「おそらく不動博士もお忙しい身でしょう。月末の世界大会までに間に合うかは難しいラインです。ですから、今回は現状のプログラムで挑みましょう。ですが、いかがでしょうか？ 今後のためにも、継続的な管理を安定させるためにも、我々で一からWOFの新しいプログラムの設計を始めても——」

臣下の「丁寧な」提案をすべて聞き終える前に、王者はおもむろに画面に背を向けた。そのままガレージ内の壁に頭をもたげ、目頭を抑える。ジャックは低く、珍しく消え入るような小さな声で呟いた。

「本当に、忘れ物の多い男だった」

その姿からは、普段の堂々たる振る舞いが嘘のようだった。

「オレのWOFに断りもなく、こんなものを置いていくとは」

ジャックはさらに苦々しく付け加える。暗く熱い臉の奥に浮かぶ、白い一輪のDホイールを、搭乗者以上に熱心に磨き上げていた蒼い髪のカニツクの笑顔が。自分たちと同じ言葉と文字を語っているように聞こえない、リビングやガレージに広がる柔らかな声が。あの日魔法使いの手によって伏せられた「魔法」は、時間と空間を超えて正体を明かすとともに、感傷となってジャックの胸に突き刺さった。

“忘れ物の多い男”が誰のことか、その場のスタッフらには伝わりようがなかった。臣下たちの困惑の目線が仄かにその場に漂い始める。普段とは違う王の姿に戸惑いを覚えながらも、若いエンジニアがおずおずと尋ねた。

「どうされます。手放すのは、名残惜しいと思いますが……」

オリジナルデータの制作者を除けば、この場で誰よりも“魔法のプログラム”に触れていたのが彼だった。プログラム本体には関係ないコメントアウトで書かれた言葉と見事な腕前で書かれたコードの文字列以上の文脈を、まだ発展途上である技術者なりに汲み取っていた。

要するに既存の——偉大だが、忘れっぽい魔法使いが遺したの“遺品”を、制約がある中で今後も流用し続けるか。

独立して、新たなスタッフらの手でWOFのプログラム設計を新規に立ち上げるか。

配下は王に踏襲と刷新の二択を迫ったのだ。

王者は一拍置いたあと、目元を拭って配下らに向き直った。深く息を吸い、静かに答える。

「待て。触るな。開発元に確認を取る」

迫り来るアーククレイドルの危機からネオドミノシティを救って数年。

深夜、ポッポタイムのガレージで一人、W O Fの調整をしていた遊星の脳裏にプログラム開発当時の記憶が蘇った。

ブルーノ——彼は“仲間”たちからアンチノミーと呼ばれていた——の亡き後、英雄・不動遊星は時折何かに取り憑かれたかのように、勉強と称して図書施設や書庫に籠っては膨大な書籍を読み漁った。もちろん、アカデミックな高等教育を受けられなかった遊星が次世代モーメント制御機構の開発に関わるための投資でもある。だが、なにより遊星はひとりになって“死人の声”を聞きたかったのだ。滅びの未来を救うべく、過去に遡り遊星らと戦ったイリアステルの痕跡を。かつてブルーノが遊星に語り聞かせてくれた古典を頼りに、思考の根を深く深く下ろすために。

本は不思議な媒体だった。本を通すと時代も環境も異なる、何百年数千年前の人間——死者の言葉を、声を聞くことができる。

“未来の自分自身”を名乗ったゾーンは、数百年も前に生きた英雄・不動遊星の姿と言葉を引用し、時空を越えて復活させた。そして破滅の未来に生きる人々を導き、勇気づけたという。はるか数百年前のモノや本や言葉が、時代と場所をわづ人の心や社会を動かすように——ゾーンは英雄・不動遊星を墓から甦らせることで、世界の破滅に立ち向かったのだ。

生きているものより死んだもののほうが多くを語ることを、サテライトの屑鉄に囲まれて育った遊星は直感的に理解していた。生きているものは嘘をつくこともある。しかし壊れて動かなくなった時計や家電、電子機器は、ただありのままの真実を物語る。壊れた原因を、過ぎ去った年月を、無くした部品を。そうして遊星はいつも目の前の死体が抱える問題を解決してきた。奇しくもゾーンと遊星という人間は、“死”から学びを得た、似た者同士だったのだろう。でなければ、死者に成り代わって世界を救おうなどとは思わない。

遊星は数百年前の科学者の言葉を夢中で——まるでイリアステルの彼らと対話するように——読み耽った。しかし、生者と死者の関係はいつも非対称だ。今と未来に生きるものは、ただ一方向に過去から受け取ることしかできない。どれだけ未来に生きる遊星が過去の書物や言論に「反論」をしようとも、故人にはそれが伝わらない。

ゾーンやブルーノ、パラドックス、アポリアたちもまた、“過去”に生きる遊星たちとの対話で、同じもどかしさを抱えていたのだろうか？

現代へ警鐘を鳴らしに現れた未来の使者たちを思い、遊星は暗い天井の彼方を見つめた。凝った肩を弛緩させるために力を入れてから落とすと、再び画面に視線を戻す。先日、ジャックからの要請を受けて急速WOFのエンジンプログラムの手直しを引き受けたのだった。

通話口のジャックが紡いだ結論は明瞭だった。今後WOFには遊星とブルーノの書いたプログラムを同乗させる。そのための改良は可能か——と。

プロの世界に立ち続けることを選んだジャックは、専属のスタッフやマネージャーと契約することで体制を整えた。遊星が科学者として勉強と開発に勤しむ以上は、WOFの面倒を見続けるわけにはいかない。WOFは内部のデータ共々その専属スタッフらによって引き継がれ、管理されていた。元よりプログラム関係は遊星やブルーノに任せつきりだったこともあり、引き継ぎ作業も遊星と専属の若いエンジニア間で行われたものだったから、晴れて“伏せられた魔法カード”の発動が遅れてジャックに襲いかかってきたのである。

結果として、遊星とブルーノはチームの面々に魔法を披露するタイミングを逃していた。忙しい日常と事件の狭間で伏せられた魔法カードは忘れられ、共同作業者として完成を共に見届けた遊星だけが、魔法の発動の瞬間にいたのだ。

ブルーノが遺したのは絆とヒビ割れたサングラスだけではない。チームEDsらのDホイールに残された遊星とブルーノのプログラムも、彼の“遺品”のひとつだった。ジャックは彼の魔法——彼が確かに生きて、チームの優勝を心から願っていた呪文——を目の当たりにして、初めてそれを意識したのだろう。真っ先に確認されたのは、それと思い至らず“遺品”を改良し続けていたことの可否だった。その声色はどこか贖罪のようなものが込められていたように聞こえたが、ジャックを責められる理由は一切ない。大量生産・流通の時代では、そもそもみな目の前にある不思議な電子機器等が、誰かの「作品」であるとは思わないだろう。そう思わせないことまで含めて「魔法」なのだから。

「……あいつは、本物の魔法使いだったのだな」

オカルトの類を嫌うジャックが、ぼつりと通話口にそうつぶやいたのが遊星の耳に残っている。王に似つかわしくない、ほんの少しの後悔と感傷が混じった言葉だった。

しかし、この“魔法の遺産”の公開を迷った遊星にも一因がある。わざわざ掘り起こして、ブルーノとのかけがえのない時間がもう戻らないことを思い知らせ

るよりも、各々がそれぞれの道に向かつて走ってくれたほうがいい。それに、いつか彼らにも気がつくことがあるだろう。その時は、自分が説明の責を負えば良いと。遊星がそう訥々とジャックに語ると、腹落ちしたのかプログラムの改良を任されたのだ。

過去から未来に引き継がれるものは、何も本や言葉だけではない。いま遊星の目の前に広がっている、ブルーノが遺したプログラムの文字列を通して、彼と対話している。

今なら理解できるコードもあれば、今でもなお不明なもの、再現可能なもの、不可能なもの。コピーしてもうまく作動しない不思議なコード……。さまざまな魔法を、ブルーノは遺した。今思えば、この摩訶不思議な一部のコードは彼が未来の世界で活用されていた技術を現代に輸入したのだろう。遊星には解析できなくて当然のものかもしれない。

彼の芸術的なコードをすべて書き換えるのは名残惜しいので、当然元の完成データのバックアップは保管してある。遊星は同時に、このプログラムがより広く活用できるように——と、世界中のプログラマーやエンジニアが活用する開発プラットフォームの片隅に、このデータを共有財産として公開していた。当然、見せられないようなコメントの会話や特定可能な情報は削った上で、だが、

そうして完成品のコードのコピーを適宜書き加えながら、今日も遊星号らは稼働している。もしかしたら、名も知らぬ人々が思いもよらない形で活用してくれているかもしれない。そうしてブルーノの遺伝子を少しでも生き延びさせる。そうすることが、遊星にとっての希望でもあった。

明け方、ジャックがWOFを迎えに来た。突貫の徹夜仕事になったが、無事彼の要望通り、問題の箇所の調整は完了した。今後の開発のための大型アップデートは、専属スタッフらとの連携がまだ必要だろう。その旨を伝えられるなり、ジャックは礼も早々に勇足に美しい白馬へ乗り込んだ。

「こいつは、オレが表彰台に連れていく」

そう言ったジャックの言葉には静かな力が込められていた。WOFの車輪に添えられた彼の手と目線は、WOFの中に今も生きている魔法使いに向けられたものだろう。

「期待している」

「それと遊星」

ヘルメットを被り、遊星を背にしたままジャックが告げる。

「クロウとの戦績はオレの勝ち越した。覚えておけ」

どうやら最後の魔法の他に残っていたコメントもジャックは目にしたらしい。ジャック専属の若いエンジニアは、なかなか腕の立つ好青年だった。開発に邪魔な余計なものもかかわらず、わざわざ消さずに残してくれていたのだろう。

「それはわからないな。更新されるかもしれないぞ」

遊星が軽口を叩くと、ジャックは鼻を鳴らしてエンジンを稼働した。白く美しく高速回転する運命の車輪がガレージから旅立っていく。

彼なら一番にしてくれるだろう。チームSD'sいちの気の良いメカニックの青年の魂をWOFに乗せて、何度でも。

「おい遊星、『魔法』って……」

不思議とタイミングというものは重なるらしい。珍しく、シングル世界大会決勝の中継と一緒に見届けようとクロウから声をかけられたのだが、どうやら本題は例のブルーノの『遺品』のプログラムの話だった。遊星とジャックの決闘にあつてられプロ入りしたクロウにも、ブラックバード号の『中身』を見る機会があつたのだろう。例のアスキーアートで描かれたSDsのロゴとブルーノのメッセージは、クロウにも衝撃をもたらしたのだろう。幼馴染にも告げたように、遊星は通話口のクロウにも「種明かし」を初めていく。

「ああ、それがWRGP予選前にブルーノが仕込んでくれた呪文だ」

あの当時、コミュニケーションの一環としてクロウがエンジニア二人と語らつたのを、彼はきちんと覚えていたらしい。なんだよアイツ、オレにだって見せてくれて良かっただろ——と震えるクロウの声が、遊星の胸に鋭く刺さつた。返す言葉がない。クロウはしばし沈黙してから、遊星にぼつりと尋ねた。

「なあ、そもそも、これ勝手にオレらが書き換えてていいのか」

クロウから送られたデータも、どうやらチームのエンジニアが気を使って“魔法の呪文”は消さないでくれていたようだ。

「ああ、構わない。ジャックにもそうしてもらっている」

「そっか。それならいいけどよ……」

「いいんだ。ブルーノもそう言ってくれていたから」

ブルーノによって書かれたコードは、本人だけでなく遊星や他の人々の手でも何度でも蘇っていく。生き続けていく。

「“気の良い奴が一番になる”」

「あん？」

「そういうふうに出てきているらしい。この世界は」

遊星はふと、あの日ブルーノが引用した『利己的な遺伝子』の章題を口にした。あのとき感じた違和感を払拭するために読み直した今なら、遊星にもわかる。ブルーノは決して、人間が遺伝子の奴隷だと悲観するためにその話をしたのではない。むしろ——意志を持って遺伝子の命令に逆らうことすらできるのだと——命懸けで遊星に希望を託したブルーノが、身をもって教えてくれたのだ。

「それならオレでもわかるぜ。みんなにメシ配ってるやつは気前がいいし、評判もいい。仲間がすぐ集まる。ズル賢い奴に裏切られた時に、真っ先に助けてくれる仲間が。だから生き残る。——そういうことだろ？」

誰に教わってきたわけでもなく、その言葉通り生きてきたクロウには小難しい理屈など不要だった。彼に生存戦略を強いた世界は、優しさが勝ち残ることもまた証明してくれたのだから。

「優勝はまたまたこの男、キング……ジャック・アトラスだ〜！」

リーゼント頭のMCが中継越しに張り裂けんばかりの声で勝者を称える。シングル世界大会の決勝、ジャック・アトラスは何度目かの制覇を果たすとともに、宣告通り愛車を一番の表彰台へ連れていってくれたようだ。

王の戴冠式さながら、表彰台にジャックと共に並んで輝くホイール・オブ・フォーチュンを、遊星は静かに見つめた。

今日も“気の良い奴”が一番になっている。

クロウとの通話を終え、中継を見届けた遊星は夜風に当たりにラボの外へ出た。吐き出した息は心なしか白い。見上げた故郷の夜空にちりばめられた満点の星々と、ブルーノが遺した道徳律、この二つを思うたびに遊星の胸は感嘆と畏敬の念で満ち溢れそうになる。はるか遠い宇宙の星々に憧れて、人々は地上に星を灯した。あの灯火のひとつひとつに人の営みがある。生きている。

ブルーノの書いたコードは、遊星よりも、チームSDIの名声よりも、ネオドミノシティよりも、ずっとずっと長く生き続けてくれるかもしれない。

人は必ず死ぬ。だが、ときにモノは、情報は、遺伝子は生き残る。電子データもまた遺伝子と同様に、複製可能な存在なのだから。舟を変え身体を変え形を変え、乗り継いだ先にたどり着ける場所がある。

そしていつか遠い未来に産まれてくるブルーノに、届けば良いと思った。

〈星の方舟 了〉

そうだね…

全ての  
デュエリストたちが  
クリア・マインドの  
境地へ至る未来も  
そう速くないのかも  
しれない

クリア・  
マインドへと  
至る道…

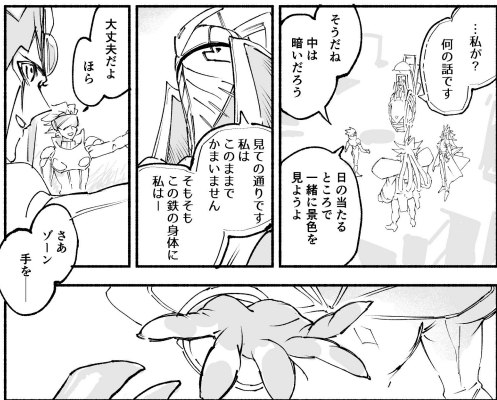
争いもなく  
破滅へ至らぬ  
未来…

願わくば…

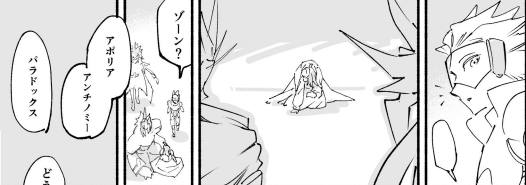
今このような  
平和な時が  
永久に続くことを…

純粹理性の子どもたち



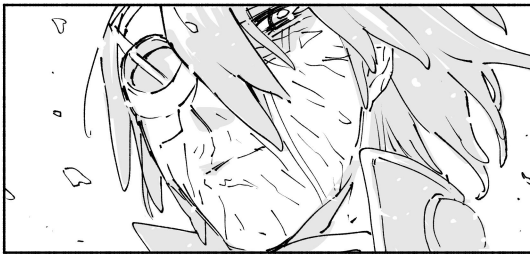
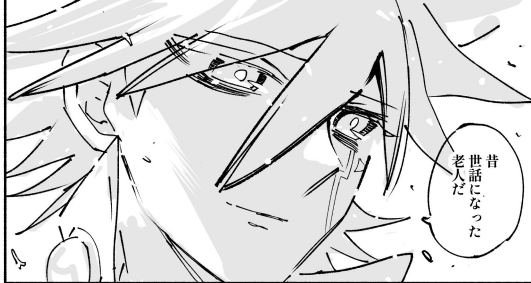














はるか遠い星々が  
築いた遺産の上に  
産まれた子ども



太陽輝く  
蒼空の下にも  
月の見えぬ  
夜空の下にも



星のまなざしは  
すべての子に  
降り注ぐ





いつも  
そばにある

死は  
星は

我ら  
純粹理性の子



## 純粹理性の子どもたち

遊戯王 5D's 未来組 非公式ファンブック

---

2026年3月8日 未来組webオンリーイベント「星霜の方舟」発行

発行者 Y

発行所 TALLYHOOO!!  
<http://tallyho.fool.jp/>

[y.tallyhooo@gmail.com](mailto:y.tallyhooo@gmail.com)

---

Thank you for Reading!